二十四、大井の大仏

　西大井五丁目にある養玉院如来寺に祀られている五智如来は、「大井の大仏」と呼ばれ、次のような話が伝えられています。

元和二年（一六一六）に、江戸幕府二代将軍だった秀忠は、キリスト教への取り締まりをきびしく続けていました。このため、元和五年には、京都七条河原で、六十人以上のキリスト教信者が、火あぶりとなり、同じ頃江戸では、五十七人が品川の海岸で、磔となりました。

五十七人全部の人が、槍でつき殺されたはずでしたが、ただ一人、命の助かった男の人がいました。処刑の後の検査もいいかげんにすませ、役人が引き上げた後、見張りの人も置いていなかったからです。

命の助かった男の名は、又七といって、神田竪大工町に住んでいた仏像を制作する人で、早くからキリスト教の信者でした。夜露にうたれて目がさめた又七は、通りかかった旅人に助けられ、これこそ神のおかげと感謝して、一度家に戻って、妻や子の顔を見ると、その日のうちに江戸から去っていきました。

江戸を出た又七は、上総の国（千葉県）の天神山にこもり、人との付き合いと五穀を断って、木食の行に入り朝から晩まで、一心不乱に仏像を彫り続けました。又七の彫った仏像は、大日如来、釈迦如来・阿弥陀如来・宝生如来・薬師如来の五体で、「五智如来」と呼ばれていますが、また、この像をキリストを中心とした、四天使像とみる人もいて、「隠れキリシタン」と、言われることもあったそうです。

この五体の仏像は、二つと無い名作と言われ、そのうわさはだんだんと広まり、代官所の役人にも伝わってしまいました。又七は、代官所の役人による、きびしい取り調べの結果、キリスト教からの転向が認められ、とがめをうけずに済みました。また、又七の五智如来をどこかに、納め祀りたいという、願いもかない、芝高輪（港区）に土地が与えられることになりました。

その後、又七は、但唱と名を改めて江戸に戻り、一緒に処刑された五十六人のめい福と供養のため、五智如来のお堂を建てることを決意して、毎日、毎日江戸市中を托鉢して回ったところ、人々は、但唱の思いを知ると、喜んで寄付に応じてくれました。このように人々の浄財により、芝高輪に寺を建て、その寺の名を帰命山如来寺と名付け、本尊として、但唱の制作した五智如来を祀り、やがて、大勢の人がお参りに訪れ、「高輪の大仏」として有名になったそうです。

寛永十四年（一六三七）に、島原の乱が起こると、幕府によるキリスト教の禁止と信者の取り締まりや処刑が行われましたが、そのもとをたつことはなかなかできなかったようです。

この幕府のキリスト教徒に対する処罰の方法が、「武門諸説拾遺」という本の中に、「寛永十七年（一六四〇）、品川において、商人、浪人、町人などのキリシタン七十余人を召し捕り、品川沖において、水磔にかける。さかさに吊るされた体は、潮が満ちてきて、首から肩をこし、潮水につかって息もつけずに苦しみもがく。また、潮の干く時は、顔がはれてしまって、人相も変わり、まるでゆうれいのようだ。八日間でみんな死んでしまった。」と、その刑罰のきびしさが書かれています。

帰命山如来寺は、明治時代になると、政府の廃仏棄釈（仏教の排斥など）により土地を失い、荒れてしまいましたが、明治四十一年（一九〇八）に、現在地（西大井五丁目二十二番二十五号）に移り、さらに大正十二年（一九二三）に下谷（台東区）の養玉院と一緒になって、帰命山養玉院如来寺となりました。

大仏の千灯供養

撮影日：2009年(平成21年) 8月 8日

（「しながわweb写真館」より）

